

「人のつながり」からみる岩波茂雄（Ⅰ）

亀井ダイチ・アンドリュウ

はじめに

岩波書店といえは、哲学書や文学書の出版で知られている出版社である。二〇一二年一月十日、岩波書店は二〇一三年四月入社の新卒・中途社員採用に際して「岩波書店著者の紹介状あるいは岩波書店社員の紹介があること」と公表し、大きな話題を呼んだ。雇用の平等性を重視する現代において、岩波の採用基準は、事実上の「縁故採用」として受け止める向きが強く、その批判も多い¹。しかし、岩波書店の歴史をたどれば、「人のつながり」というコネが、その創業時代からいかに重要な役割を果たしたのかがよく分かる。

岩波書店は、大正時代の「教養主義」運動の中で、大衆文化を中心とする講談社の「講談社文化」と並んで、学生やエリートを中心とする「岩波文化」という社会的文化を生み出

したことにより、出版文化研究史の中では言及されること多い出版社である。しかし、出版文化史の中では主にその出版データに焦点が当てられ、その内部の人間関係などにはほとんど関心が払われていない。一方、他の関連分野——岩波がその出版を得意とする文学研究、思想史研究など——では、それぞれの専門の傍証として時折思い出されたように言及されるのみであり、出版人が作家や哲学者の活動にどう関わっているのかについては、ほとんど関心が払われていないのが現状である。こうした研究傾向は、英語圏——特に北米における近現代日本研究において、極めて顕著である。しかし、出版社は文学者や哲学者などといった知識人らの活動にとって、その著作を出版するという点だけを取り上げても重要な存在であり、その出版に至る過程も考慮にいれるならば、決して無関心でいてよい対象ではない。

この研究ノートでは、岩波書店の創業者・岩波茂雄を取り

上げ、岩波とその周辺の人々とのつながりの一部を数回に分けて紹介しながら、出版社と知識人らの関係、および「人のつながり」という視点を研究に取り入れていく重要性について考えてみたいと思う。

第一回の今回は、岩波茂雄と夏目漱石との関係に焦点をあて、漱石が岩波書店の創業時代に与えた影響について紹介する。

一、岩波茂雄という人物

まず最初に、岩波茂雄の経歴を簡単に振り返ってみたい。茂雄が生れたのは、明治十四年（一八八一）八月二十七日。長野県諏訪郡中洲村中金子の農家の長男であった。十五歳で父を亡くし、戸主となった茂雄は母とともに農業をしていたが、明治三十二年（一八九九）に、高等教育を受けるため上京する。この上京については、岩波の母の配慮が大きかった。岩波の希望を受け入れてやりたいと思いつつも、親戚や世間の手前もあり容易に同意を出せなかった岩波の母は、岩波が無断で出京したという形をとってこれを許したのである。^③そうして日本中学に入学した茂雄は、翌年には卒業、上京して二年後の明治三十四年（一九〇一）に第一高等学校に入学する。クラスメートの中には、後にドイツ文学者となった林久男やキリスト教学者として知られるようになる石原謙ら、後

に知識人として名を馳せることになる人物がいた。

この第一高等学校における人間関係は茂雄の後の人生に多大な影響を与えることになるのだが、その中でも特に注目したいのは、阿部次郎および安倍能成の存在である。阿部次郎は岩波の同級生で、哲学者・美学者、また作家として、今でもよくその名を知られている人物であり、安倍能成は後に文部大臣や学習院長を務め、哲学者でありつつ、教育者・政治家としてより名を知られることになる人物である。

後述するように、この二人の「あべ」を通じて、岩波は自分の人生を変える出会いのチャンスを得ることになる。

第一高等学校在学中の明治三十六年（一九〇三）、岩波を大きな衝撃が襲った。五月二十二日、岩波の友人の一人であった藤村操が、栃木県日光市の華厳の滝より投身自殺を遂げたのである。その死に際し藤村が木に残した遺書「厳頭之感」は当時の社会にかなりの衝撃を与えたが、岩波も藤村の死に強い影響を受けた一人であり、一時期は死を真剣に考えたという。^④また、藤村の英語の教師として夏目漱石がいるが、漱石が受けた衝撃もかなり大きかったらしく、後の著作『吾輩は猫である』や『草枕』にも藤村の死に言及している文章が見受けられる。^⑤

この藤村の死の衝撃から落第した岩波は、試験放棄も重なり、第一高等学校から除名中退となる。しかし、明治三十八

年（一九〇五）には東京帝国大学文学部哲学選科に入学。当時の哲学科は、明治後半期を代表する哲学者の井上哲次郎や、お雇い外国人として来日していたラファエル・ケーベル⁸などを教授陣として抱えていた。

明治四十二年（一九〇九）、岩波は神田高等女学校の教師となるが、大正二年（一九一三）七月には教職を去り、八月五日には神田南神保町に古本屋を開業する。これが現在の「岩波書店」の原点である。当時、神田周辺には多くの古本屋が店を構えていたが、岩波書店はそれらの古書店と、ある一点で一線を画していた。それは、古本の正札販売である。

古本はもちろんのこと、新刊を買う際にも値切るのが常識だったこの時代、当時の習慣に反するこの岩波の姿勢にはかなりの抵抗があったが、岩波は古本のみならず新刊も定価販売するという姿勢を貫き続けた。古本屋を開業した翌年の大正三年九月には、夏目漱石の『こゝろ』を刊行し出版社として歩み始めるが、大正四年十月からは「本店の出版物はすべて定価販売御実行被下度候」という一文を発行図書の本に記していったという⁹。はじめはかなり抵抗のあった書籍の定価販売だが、岩波の方針をきっかけに、書籍の定価販売は習慣化されるようになる¹⁰。

こうして、教師から古本屋へ、そして出版人へと変わった岩波茂雄だが、教職を去って一カ月で古本屋を開業し、ま

たその「正札販売」という商売方針が強い抵抗を受けたにも関わらず、開業からわずか一年で出版業も手掛け、出版社として大きく成長していくことができたのはなぜだったのか。岩波自身の才能もあったのかもしれないが、それ一つに理由を求めるわけにはいかない。岩波の創業時代の成功には、その周辺の人々——特に夏目漱石を中心とする人々とのつながりが、非常に大きな役割を果たしているからである。

二、夏目漱石とのつながり

今では明治時代を代表する作家として名高い夏目漱石。漱石の周辺には多くの人々が集まっていたが、その門下生らを中心にした「木曜会」が最も名高いものの一つであろう¹¹。漱石宅には門下生をはじめとしてひっきりなしの訪問客があったため、明治三十九年（一九〇六）十月に、鈴木三重吉が漱石との面会日を毎週木曜日の三時以降に設定したことから「木曜会」と呼ばれるこの集まりは、漱石の人間関係を示すうえで非常に興味深く、当時から現在に至るまでいろいろな形で描かれている。

その中で最も代表的なものとして、漱石の友人・津田清風による絵がある。そこに描かれているのは夏目漱石自身の他、以下の十一人である。先述した岩波の友人阿部次郎、安倍能

成、漱石の弟子として著名な小宮豊隆。小説家野上弥栄子の夫で、英文学者の野上豊一郎。俳句詩人の松根東洋城、作家であり物理学者でもあった寺田寅彦。小説家森田草平、鈴木三重吉。作家赤木桁平と内田百閒。そして岩波茂雄もその中に含まれている。しかし、ここに描かれている人のみが「木曜会」のメンバーであったわけではない。顔ぶれや人数は時によって変わり、一時的に参加した人々も少なからずいたが、まったく見知らぬ人物が飛び入りで参加できるものでもなかった。

津田清風の絵の中では「木曜会」の主要メンバーとして顔を連ねている岩波茂雄だが、もともと漱石と近い関係にあったわけでもなく、若手の文学者や学者が中心の会で、そのどちらにも属さない岩波はいささか異端に映る。岩波が「木曜会」に参加し、その存在が認められるようになったのには、一高時代からの友人・阿部次郎と安倍能成の存在があった。阿部次郎は漱石に師事し、また東京帝国大学哲学選科在学当時から「帝国文学」に寄稿し、漱石が朝日新聞に勤務していた時代、漱石主宰による「朝日文芸欄」にも執筆していた関係で、漱石とはすでに確固としたつながりがあった。安倍能成も、一九〇六年に友人が漱石を訪ねるのに同行してより漱石を敬愛し、親しく出入りする関係にあった。このふたりの「あべ」は、漱石の門下生として他の門下生とも交流を深めており、明治四十四年（一九一）には彼ら二人と森田草平、

小宮豊隆と合著で『影と声』を出版している¹⁶。このふたりの「あべ」を通じて、岩波は漱石やその門下生らと交流を深めていくことになるのだが、それは岩波にとって知的刺激をもたらしたのみならず、出版人として成功するうえで貴重なネットワークとサポートを得る機会にもなったのである。

三、「つながり」がもたらした転機

先に述べたように、古本屋を開業した岩波は正札販売を徹底したが、その方針は当初なかなか理解されず¹⁷、日々の売り上げも決して多くはなかった。資本金として準備した八千五百円は郷里の田畑を売って手に入れたものであり、決して小さな金額ではなかったが、開店準備の本の購入をはじめ、毎年二千円ほど支出を重ねており、経営状況は決して上向きではなかった。後述する大きな仕事が無い込んできた時でさえ、それを引き受けるための十分な資金がないありさまであった。そこで岩波が頼ったのが夏目漱石である。漱石は岩波の依頼に応え、何度か資金援助をしている。漱石の援助がなかったとしたら、岩波書店は創業間もなくして店じまいをする羽目になったかもしれない。しかし、岩波が漱石から得た最大の援助は、この資金援助ではなかった。古本屋としてスタートしたものの、いずれは出版を手掛けたという希望を持つ

ていた岩波は、漱石が朝日新聞に連載していた小説「こゝろ」を自分に出版させて欲しいと漱石に持ちかけ、漱石の承諾を得たのである。これが岩波と岩波書店の大きな転機となった。

漱石の「こゝろ」を岩波が出版する。当時漱石はすでに名の知られた作家であり、「こゝろ」は新聞連載当時から好評を得ていたため、それを出版すれば出版社がどこであろうと必ず売れる、という見込みがあった。出版社として新たな一步を踏み出そうとする岩波にとつて、これほど望ましい作品は他になかったであろう。しかし、漱石にとつてはどうだったろうか。資金繰りですら満足にいけない、自分が資金援助すらしている出版経験のない本屋から、ドル箱となることが容易に想像できる自分の作品を自費出版する。一見マインナス要素ばかりに見えるが、これは漱石にとつても利のある話であった。

漱石は自分の作品が出版される際に、どのように編集されるかについてあまり気にしていなかったと言われるが、それは漱石自身の選択というより、当時の作家として作品の編集過程に及ぼせる影響力は限られていたというのがむしろ現状に近い。自費出版するということは、出版に関していろいろと自分の意思を反映してもらいやすい、ということにつながるが、その出版社が岩波のように白紙の状態であればなおのことである。実際、岩波から『こゝろ』を出版するにあたっ

て、漱石は表紙と紙箱を自分でデザインするなど、その装幀にかなり関わっているのである。出版された作品が、これほどまでに作者の好みを反映しているというケースは、当時においてかなり珍しい。

漱石がその作品の出版を岩波に任せたと、いう事實は、岩波が出版社として社会的な信用を勝ち取る機会となった。

『こゝろ』が刊行されたのは大正三年（一九一四）九月二十日。そして、それから二カ月足らずの同年十二月に、岩波はある人物の訪問を受けた。その人物とは太田為次郎²⁰。岩波とはもともと何の縁故もなかった人間だが、太田は台湾総督府図書館創立の任務を帯びて、図書の購入依頼に岩波のもとを訪れたのである。当時日々の売り上げが何十円にしか過ぎなかった岩波書店にとつて、その数十倍の一万円という巨額の利益を約束する仕事の依頼であった²¹。これが前述した「大きな仕事の話」である。

太田がなぜ図書購入の依頼先として岩波を選んだのか、正確には分からない。当時日比谷図書館長であった今沢磁海の勧めもあったとい²²、岩波の正札販売の方針が受け入れられたのだという見方も強²³。しかし、これが岩波の処女出版である『こゝろ』が刊行されて二カ月程度というタイミングから推して、内部の経済的事情はどうあれ、漱石が自分の作品の出版をゆだねたという事実が、この異例の大口注文と無関

係であったとは考え難い。⁽²⁵⁾

経営資金の援助といい、出版の件といい、岩波は夏目漱石に多くを負っている。大正五年（一九一六）の漱石の死後、漱石全集がその弟子らによって企画された際、岩波は漱石作品の出版にかけては一日の長があった春陽堂や大倉書店を退け、小宮豊隆や漱石夫人の賛同を得て「漱石全集刊行会」の名で、その出版を引き受けた。この全集の編者は、寺田寅彦、松根東洋城、森田草平、鈴木三重吉、小宮豊隆、野上豊一郎、阿部次郎、安倍能成の八人。森田や鈴木は、春陽堂と個人的な縁故もあった関係で春陽堂を推していたが、最終的に岩波が引き受けることになったのは、岩波の強引さもさることながら、岩波と漱石の信頼関係、および漱石の弟子らとの広い交流と無縁ではなかったであろう。岩波茂雄とは直接的な関係を持たなかった芥川龍之介のような作家も、漱石と岩波の間に築かれた関係に影響を受け、岩波との結びつきを模索したからである。芥川がその死に際して自らの全集の出版の権利を岩波書店に与えたのは、自らが敬愛する師に做ったことであった。

上記の漱石全集出版にみえるような岩波の押しの強さは折にふれて指摘されるところだが、その岩波の強引さに対して漱石がどう感じていたかを示すエピソードがある。それは、岩波書店の看板である。開業する古本屋の屋号は自分の姓を

取って「岩波書店」とすると決め⁽²⁷⁾、岩波はその字の揮毫を漱石に依頼した。漱石は引き受けたものの、なかなか自分が納得するものがないということで、岩波に何も渡していなかった。時間ばかりが過ぎ、イライラの募った岩波は、ある日漱石の書斎に入り、そこに置いてあったものをよいと思つて無断で持ち帰り、それを岩波書店の看板として掲げたが、漱石はそれに対して怒りはしなかったという。考えようによっては失礼極まりないこうした岩波の行動を、なぜ漱石は怒らなかったのか。竹内洋は「漱石は」直情径行であっても誠実な性格に好感をもったからであろう⁽²⁸⁾と、漱石の岩波に対する人間的な好意にその原因を求めている。

岩波はそうした漱石の好意、また漱石との親交を作るきっかけになった友人らの行為を、決して当たり前と受け止めていたわけではない。「僕は安倍能成君の紹介によって先生の知遇を得たのであるが、先生は僕の如き一書生風情の本屋に看板の字まで書いて下さり、その著作を出すことを快く許して下さい⁽²⁹⁾」と、後年になっても感謝の気持ちを持ち続けた⁽³¹⁾。

岩波を支えたのは、何も漱石一人のみではなかった。古本屋を開業すると決めてから、岩波はそれを自分の周辺の人々に話して回っていたが、それを聞き、はたして商売が上手いくのか心配した者も多かった。安倍能成は、岩波が出版を

始めてまもなくは、岩波書店の出版広告のほとんどを書いていたという。岩波の商売は彼の知人・友人らに支えられていたといっても過言ではない。

大正四年から六年にかけて、全十二巻にわたる「哲学叢書」が出版された。これは、岩波書店に哲学関連書籍の出版社としての名を高からしめ、当初の売れないであろうとの不安をみごと裏切り、当時のベストセラーともなったのだが、この叢書の編集者は阿部次郎、安倍能成、上野直昭。岩波の一大時代からの友人であった。彼らは西田幾多郎や朝永三十郎、桑木巖翼、三宅雄一郎などと相談しつつ編集したが、この叢書の著者には三人の他に、前述した石原謙、先輩にあたる紀平正美、速水滉なども名を連ねている。

おわりに

安倍能成は「著者を友人とする」のは「岩波書店の特色として長く続いた」と述べているが、著書の出版というのは知識人らの活動にとって非常に重要な要素である。岩波自身は哲学者でも文学者でもなかったが、漱石をはじめとする知識人らとの交流を通し、彼らの活動を担う一翼となっていたのである。

こうしてみると、出版文化や文学研究の理解を深めるうえ

で、その時代の文化に貢献した知識人同士の関係、および彼らと密接な関係のあった出版社との関係について関心を払う必要があることがわかるのではないかと思う。この第一回目の研究ノートでは、漱石をはじめとする知識人らとの交流が岩波にもたらしたものを中心に紹介したが、知識人らとの交流はたんに岩波が得るばかりの一方通行的な関係であったわけではない。岩波が彼らとの交流でビジネスチャンスをつかんでいったとの同様に、知識人らは岩波との交流を通じて自分たちの活動の輪を広げる機会を得ていくことになった。

第二回では引き続き、西田幾多郎を中心に、岩波と知識人らのつながり、そしてそれによって岩波がいかに大正教養主義に貢献していったのかについて紹介したいと思う。

註

- (1) 岩波書店の小松代和夫総務部長は「大学生ならゼミの先生に紹介してもらうなどすれば、当社の著者にたどり着ける。「紹介状をもらう」こと自体が1次選考だと考えてほしい。紹介はあくまでも応募資格で、可否の判断基準ではない。紹介者による有利不利もない」として、この採用基準が「縁故採用」であることを否定している。
- (2) 長野県といえは今でも教育のレベルの高さでよく知

られているが、二十世紀前半にも多くの知識人や作家、また出版人を生み出している。岩波自身もそうした出版人の一人であるわけだが、その他にも長野出身者が集まってきた筑摩書房などがある。また、岩波の友人やクラスメートの中には、気象学者として著名な藤原咲作などをはじめ、文系理系を問わず、後に知識人として名を馳せる人々が多かった。

(3) 安倍能成『岩波茂雄傳』、三三頁。

(4) 酒田市では阿部次郎文化賞を設けており、また東北大学では二〇〇八年に高校生を対象とした阿部次郎記念賞を創設している。

(5) 藤村操の遺書、「巖頭之感」は以下の通りである。

「巖頭之感 悠々たる哉天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとす、ホレーシヨの哲學竟に何等のオソリチイーを償するものぞ、萬有の真相は唯だ一言にして悉す、曰く「不可解」。我この恨を懐いて煩悶、終に死を決するに至る。既に巖頭に立つに及んで、胸中何等の不安あるなし。始めて知る、大なる悲觀は大なる樂觀に一致するを」。

(6) 岩波は同年夏より四十日間、郷里信濃の北奥野尻湖にこもっている。

(7) 「打ちちゃって置くと巖頭の吟でも書いて華嚴滝から飛

び込むかも知れない」(『吾輩は猫である』十)。ここでは藤村の名は言及されていないが、その遺書である「巖頭」と自殺した場所の華嚴の滝が明言されており、漱石が藤村のことを頭においていたのは明らかである。また『草枕』では、「余の視るところにては、かの青年は美の一字のために、捨つべからざる命を捨てたるものと思つ」と、漱石が藤村の死を認めがたく思っていることを示唆する文章があり、またその他にも「ただその死を促すの動機に至っては解しがたい。去れども死その物の壮烈をだに体し得ざるものが、如何にして藤村子の所業を喰い得べき。かれらは壮烈の最後を遂ぐるの情趣を味い得ざるが故に、たとい正当の事情のもとにも、到底壮烈の最後を遂げ得べからざる制限ある点において藤村子よりは人格として劣等であるから、啜う権利がないものと余は主張する」など、藤村の死の理由を理解できないとしつつも、藤村の死をあざ笑う者たちに対して壮烈な批判を加えている。

(8) ラファエル・フォン・ケーベル (Raphael von Koerber 一八四八〜一九二三) は明治二十六年(一八九三)に東京帝国大学の哲学教師として来日したが、哲学の他、ドイツ語やラテン語なども講義した。その教え子には岩波茂雄の他、安倍能成、高山樗牛、波多野精一、和辻哲郎、

九鬼周造、柳田國男らがいる。また西田幾多郎、田辺元など、後に井上哲次郎を中心として、より政治哲学に近い合理主義的な哲学を発達させた東京学派に対し、京都大学をベースにより急進的な哲学観を發展させた京都学派の中心メンバーもケールルの教えを受けた。こうした数々の弟子の中でも、おそらく一番有名なのは夏目漱石だろう。漱石は、その著『ケールル先生』の中で「文科大學へ行つて、此處で一番人格の高い教授は誰だと聞いたら、百人の學生が九十人迄は、數ある日本の教授の名を口にする前に、まづフォン・ケールルと答へるだらう。斯程に多くの學生から尊敬される先生は、日本の學生に對して終始渝らざる興味を抱いて、十八年の長い間哲學の講義を續けてゐる」と、ケールルに対して深い敬意を示している。

(9) 岩波が神田高等女学校に職を得たのは、その友人・阿部次郎の紹介による。当時、校長を務めていたのは竹澤里であったが、その娘のつねが後に阿波次郎の夫人となつてゐる。

(10) 岩波が正札販売にこだわつたのは、自分が買い手として値引き販売に嫌悪感を感じていたためであった。開店案内として各方面に配つた挨拶状には「就ては従来買主として受けし多くの苦き経験に鑑み、飽くまで誠実真

摯なる態度を以て」と記載されている。また安倍能成は「小売店で読者に一割引で売るなら始めから一割引いたものを定価にすればよい。定価を決めておいて其以下に売る方法はないとの意見だったので、自分の出版物は定価販売してくれと奥付に書き、それを実行しない所は取引を止めた」という、書籍の定価販売についての岩波の言葉を紹介している（安倍能成『岩波茂雄傳』）。

(11) 『岩波書店70年史』。

(12) 大正三年三月には、雑誌の割引販売を防止するため、東京雑誌組合が創立された。

(13) 芥川龍之介は、初めて漱石に会つた時の印象として「人格的マクネイズムがあつた」と述べている。

(14) この「木曜会」は、ゾラやモーパッサンらをはじめとするフランス自然主義作家によるメダン・グループと、日本文学・芸術の「パンの会」に刺激を受け、これらを真似た形で始まつたといわれているが、それらの会と比べてはるかにこじんまりとした私的サロンのような趣を持つていた。漱石自身がイギリスで経験した、教授とその學生らの集まりに影響を受けた点もあるかと思われ、江戸時代にみられる儒學者とその弟子らによって構成された集まりをも想起させる一面がある。

(15) 「木曜会」を描いた数々の絵を見ると、その顔ぶれが

統一されていないことがわかる。またその他にも、漱石のもとには小説家の久米正雄、作家で批評家の江口渕、新聞記者の池辺三山、そして小説家で詩人の大塚楠緒子なども集まっていた。

(16) 明治四十四年三月、出版社は春陽堂。

(17) 当初は正確な買入れ値段が分からず、仕入れ値が高すぎたために、利益はわずかにもかかわらず、かえって高い値段がついたものもあったという。しかし、岩波は自分の無知を客に課してはならないとの思いから、損をしても正札販売に努めた。また開業当時、岩波は品不足の棚を埋めるために、友人から借りた本や自分の本を並べ、なるべく売れないように一番高い値段の棚に置いていたという(山崎安雄『岩波茂雄』時事通信社、一九七一年、五四〜五五頁)。

(18) 一例として、明星聖子は「Struggling with Soseki: Practices and Problems of Modern Textual Editing in Japan」(STS 14th Biennial International Conference 2009)で、その点を指摘している。

(19) その装幀は中国古代の石鼓文の石摺から取ったものであり、漱石の死後に全集を出すにもこの装幀が使われた(安倍能成『岩波茂雄傳』、一二九頁)。この装幀の件について漱石は、「装幀の事は今迄専門家にばかり

依頼してゐたのだが、今度はふとした動機から自分で遣つて見る気になって、箱、表紙、見返し、扉及び奥附の様および題字、朱印、検印ともに、悉く自分で考案して自分で描いた」と、『こゝろ』巻頭の「序」で語っている。

(20) 太田は、帝国図書館司書長、日本図書館協会会長などを務め、後には岩波から『日本随筆索引』を出している。

(21) 当時、千円以上の取引に関しては競売にかけるとの決まりが官庁ではあったが、太田は長官の許可を取ってきており、岩波は近所の同業者から名前を借りることによってその体裁を整え、請求書を出した(山崎安雄『岩波茂雄』、五六頁)。

(22) 山崎安雄『岩波茂雄』、五六頁。

(23) 同前、五六頁。

(24) 通常、漱石の『こゝろ』は岩波の処女出版であったといわれ、岩波自身もそう述べているが、実際『こゝろ』が刊行されたのは大正三年九月二十日のことであり、実はそれ以前に二つの本が岩波から出版されている。その二冊とは、諏訪敬三郎『宇宙之進化』(大正二年十二月一日発行)、内田正『儒家理想学認識論』(大正三年五月九日発行)である(『岩波書店五十年』、二頁)。

(25) 安倍能成は、太田が岩波書店を選んだ理由として「当時岩波書店の信用が心ある人々の中に已に存して居たことが分かる」と述べている(安倍能成『岩波茂雄傳』、一三三頁)。

(26) 安倍能成『岩波茂雄傳』、一四四〜一四五頁。

(27) 「岩波書店」の名は、岩波の夫人・ヨシの意見で決められた。夫人が「屋号だけ世間に知られて、店主が誰だか分らぬのがいやだから、姓そのまま岩波書店としたらどうか」と言ったのに対し、岩波は即賛成したという(『岩波茂雄傳』、一一七頁)。

(28) この文字を使った額や看板は大正十二年の関東大震災で焼失しているが、その複製は今でも岩波書店本社でロビーに飾られている。

(29) 竹内洋『教養主義の没落』。

(30) 『回顧三十年』。またここで岩波は自分を漱石に引き合わせた友人として安倍能成の名のみを挙げているが、阿部次郎も漱石と岩波の架け橋となったことが指摘されている。

(31) これははるか後のことになるが、昭和十年(一九三五年)の正月元日に何をするかときかれたとき、岩波は年賀の挨拶五十八件の他、ケーベル、夏目両先生の墓参りと答えた(安倍能成『岩波茂雄傳』、四四三頁)。

(32) 安倍はこうした岩波の行動を「岩波らしい」と評している(安倍能成『岩波茂雄傳』、一一六頁)。

(33) 安倍能成『岩波茂雄傳』、四五七頁。

(34) 当時は哲学書や翻訳書などは売れないものの代表であり、哲学叢書第一編の紀平正美の『認識論』を千部刷ったとき、紀平本人が「そんなに刷って大丈夫かね」と案じたという。それが予想以上に世に歓迎され、当初全十二巻のために用意であった紙は、早くも二、三巻でなくなつた。その大半は何百と版を重ねたが、中でも速水の『論理学』は旧制高校や専門学校の教科書・参考書として活用されたため、現在までに二十七万部以上印刷された(山崎安雄『岩波茂雄』、六九〜七〇頁)。

(35) 叢書の各著者・タイトルは次の通り。紀平正美「認識論」、田辺元「最近の自然科学」、宮本和吉「哲学概論」、安倍能成「西洋古代中世哲学史」、速水滉「倫理学」、石原謙「宗教哲学」、阿部次郎「倫理学の根本問題」、上野直昭「精神科学の基本問題」、安部能成「西洋近世哲学史」、高橋穰「心理学」、高橋里美「現代の哲学」。

(36) 安倍能成『岩波茂雄傳』、一四七頁。